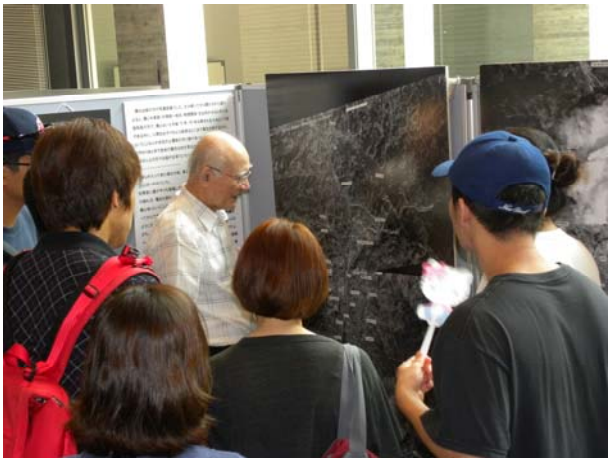
Footprint
フットプリント
写真資料
調査部会発行
H22.12.6
2010年
第8号

夏の原爆写真展
「長崎原爆を撮ったカメラマン」

山端庸介
林　重男
松本栄一
小川虎彦
石田　壽

国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館



原爆写真展特集

六十五周年　原爆写真展

今年の写真展は、被災写真を撮影した五人の写真家に焦点を当てて企画した。

一九四五（昭和二〇）年八月、広島、長崎への原爆投下直後から、この人類史上未曽有の惨害を記録すべく行動した、多くの写真家がいた。彼らは厳重な軍の監視、資材の欠乏など、戦中、戦後の困難な状況と闘いながら、数多くの貴重な記録を残している。六十五年を経た今、それらの写真なくしては当時の状況や悲惨さを理解することは不可能といえるだろう。また、一九七九（昭和五四）年夏、ボランティアとして発足した当部会の前身「長崎の被爆写真調査会」は、これら写真家との交流の中でその後の活動を発展させ、現在三千枚余りの写真を所有するまでに成長した。その陰には当時の会員の献身的な努力と、写真家の利害を超えた協力があったことを忘れてはならない。以来三十年、写真を提供頂いた写真家、また当会創立メンバー六名のうち五名が既に他界した。後には写真家の生命を懸けたともいえる多数のプリントが残された。

生前、松本栄一氏はインタビューの中で「噂とはいえ今後七十年、八十年は草木も生えぬという話のある中に、人間を出すけれど医者はどこまで責任を持てるのか、ということなんかを社の上層部の方に掛け合ったらしいんですね。そういう意味ではとにかく新聞社というものは人を出す（派遣）ときに弾丸（たま）の中にだって人を出すんじゃないかと、その代わりあとまで安全の責任は社が見るから、面倒はみるから、だから出せと…。」覚悟した様子を話している。

近年核廃絶の機運の高まりとともにその重要性を増している被爆写真。彼らから託された思いを無にすることなく、今後も有意義に活用していかなくてはならない。

時津町で「ナガサキ原爆写真展」

七月二十七日～二十九日まで西彼時津町役場玄関ロビーで「ナガサキ原爆写真展」を開催した。同町での原爆写真展は一昨年と昨年に続いて三年連続の開催。

長崎市に隣接する旧時津村は、被爆直後から被災地から多数の重軽傷者が運ばれ、村をあげて救護活動が行われたのは周知の事実。

このような歴史的背景もあって、時津町では平成六（二〇〇八）年には県内自治体にさきがけて「時津町核兵器廃絶平和推進の基本に関する条例」を制定したほか、毎年八月九日には「平和の集い」を開くなどして平和推進事業に積極的に取り組んでいる。

写真展では、被爆直後の爆心地付近の惨状や破壊された主な建造物、新興善国民学校に設けられた特設救護所での救護状況などと共に、時津村で救護所となった時津国民学校、時津警察署、萬行寺などの写真あわせて五十五点を展示、訪れた町民に核兵器の恐ろしさや戦争と平和について身近に考える機会をあたえた。

この種写真展の会場では、私は写真に見入っている高齢者を見かけた時は「原爆の時は長崎にいらっしゃったのですか」と声を掛けるのを常としている。今回の時津町の場合も、長崎や時津で被爆を体験した多くの人に出会ったが、写真の説明というよりも、その人から単に被爆当時の話を聞くだけでなく、その後たどった人生についてむしろ『聞き役』に回るケースに出くわすことが何件かあり、おのれの被爆体験と重ね合わせて、原爆のもたらした禍根の深さに痛恨の思いを新たにした次第であった。

丸田和男

連日五〇〇人を超える見学者

市民の関心が高かった「鹿児島・県外原爆写真展」

鹿児島といえば『西郷さん』、その西郷さんの銅像が目の前に立つ鹿児島市中央公民館。この建物は昭和二年に建設され、現在は登録有形文化財に指定されているが、今年の県外原爆展はこの由緒ある建物で八月二十日から二十五日まで開催された。

長崎市と長崎平和推進協会が、毎年、開催地元市と共催して開く県外原爆展、今年は「長崎原爆展」と「鹿児島市の戦災と復興写真展」が同時に開催された。「長崎原爆展」では原爆パネル写真約一〇〇点と、十一時〇二分を指した柱時計等被爆資料約三十点を展示、この他に被爆瓦のタッチコーナーやビデオ上映、小学生向けの原爆関連図書コーナーも設けられた。

開催初日にオープニングセレモニーがあり、森博幸・鹿児島市長と長崎原爆資料館の黒川館長が挨拶、続いて小学生、中学生を交えテープカットが行われた。このセレモニーには地元紙・南日本新聞のほか、NHKと地元民放四社が取材に訪れたが、マスコミ各社は原爆展の後援団体に名前を連ねており関心を持っていたようだ。鹿児島市役所と懇親会が設けられたがこの席で、「マスコミの取材が多かったですね」、と尋ねると、「地元マスコミを後援団体に入れたからですよ」と答えが返ってきた。マスコミの関心をそそるなかなか味なやり方、テレビ各社はそれぞれニュースで放送したため原爆展の大きなPRになっていた。今後、全国の都市で開催する県外原爆展では、

マスコミを後援団体にいれるよう開催予定都市にアドバイスをしたらいい結果が生まれるのではと思う。今回の長崎原爆資料館担当は高木留美子さん、被爆者の語り部は和田耕一さん、被爆体験講話会場は一〇〇人余り入る別室が設けられていたが毎回満席で、訪れた人たちは和田さんの話に聞き入っていた。

原爆展会場には連日五〇〇人を越す市民が訪れた。特に目立ったのは母親に連れられた子どもたちの姿、それに夏休みの宿題に平和問題を出されたのか、制服姿の中学生の姿も目立った。会場で鹿児島の人たちに話を聞いた。ある母親は「こんなに身近に原爆写真を見たのは初めて。子どもと一緒に原爆、戦争について改めて勉強したい」、男性「こういう戦争に原爆が使われたという事は悲しい出来事だと思う」、女子中学生「原爆の写真を見て、思っていた以上にショックだ」等々の感想が聞かれた。

鹿児島市も米軍の空襲を受けた都市の一つ、八回の空襲により市街地のほとんどが焼き尽くされたが、会場の一コーナーには空襲で消失した市街地の写真五十点余りが展示されていた。なお鹿児島市は「鹿児島市平和宣言」を行って今年で二十年目の記念すべき年だという。また鹿児島市は広島原爆の八月六日と長崎原爆の八月九日には、市役所本庁と九支所で、それぞれの投下時刻にサイレンを鳴らし、職員をはじめ来庁者は一分間の黙とうをささげるという。

原爆展が終わって鹿児島市総務課の鶴丸課長から、丁寧なお礼状をいただいた。

県外原爆展に参加して初めてのことである。「来場者に熱心、かつ丁寧にご説明をいただき、誠にありがとうございました。堀田様のお話により、戦争の悲惨さ、平和の尊さについてより理解が深まったものと存じます。

本市におきましては、今後とも各種平和啓発事業に取組んでまいりますので、引き続きご指導、ご協力を賜りますようお願い申し上げます」としたためられていた。またお礼状には各紙が報じた原爆展記事のコピーも添えられていた。地元紙・南日本新聞は8段を使って大きな扱い、朝日、毎日、読売、西日本の各紙も

好意的に大きく扱っていた。昨年は遠く東北・福島市での、今年は鹿児島市での県外原爆展に参加したが、両都市での原爆展は大成功だったと思う特に鹿児島での原爆展は初の開催だったというが、展示方法、会場の広さ等、よく考えて会場設営が行われていた。これまでに国内数か所で開催された原爆展に参加したが、多くの市民が原爆展を横目に見て通り過ぎる都市もあったが、鹿児島の人たちは積極的に会場に足を運び、原爆のこと、戦争のことに関心を持とうとする姿勢が感じられた。良い都市で開催した原爆展だった。

堀田武弘

千葉県松戸市原爆展

「松戸市原爆展」は六月二十六日～七月十一日の二週間、松戸市立博物館で開催された。松戸市は千葉県下ながら都心から電車で約三〇分の通勤圏にあり、東京の衛星都市として、七〇年代以降急速に発展を遂げた街である。松戸に向かう車窓からは、ようやく東京タワーの高さを超えたという、「東京スカイツリー」の巨大な姿が遠望された。

会場の松戸市立博物館は広大な房総台地の自然林を生かした、長崎市民には羨ましいような自然公園「二十一世紀の森と広場」の一角にあり、旧石器・縄文時代から一九六〇年代の常盤平団地の誕生に至る、三万年の地域の

歩みを常設展示している。今回は見学の機会がなかったが、団地の室内などの実物大再現展示もあり、最近の「昭和レトロ」ブームも手伝って、市立としては人気の高い博物館である。

今回の原爆展は、松戸市世界平和宣言二十五周年を記念して長崎市との共催で企画され、広島・長崎の写真パネル約一〇〇点の他、被災資料約五〇点を展示、原爆記録映画や証言ビデオのコーナーも設けられた。松戸市は8月に開催される「青少年ピースボランティア」にも生徒を派遣するなど、地元での平和関連活動にも積極的に取り組んでいるようだ。

私が展示解説を担当したのは最終日となる日曜日だったが、他の行事で訪れた人も含め、この手のテーマの展示としては、来場者が途切れることなく続いた。事前の広報が行き届いており、また博物館が市民に愛されていることがうかがえた。また同日午後からは、小ホールで継承部会原田美智子氏の被爆体験講話も行われた。

戦時中の松戸市はまだ郊外のため直接の空襲被害はなかったようだが、来場したお年寄りの中には「東京大空襲の時は空が真っ赤になった」など、自己の体験を語る人もみられ、原爆に限らず戦争の記憶が深いトラウマになっていることがうかがえた。

今回の展示見学を何かの課題にした学校もあったようで、母親に解説文を読んでもらいながらメモを取る小学生の姿もみられた。

今回の原爆展は被爆地長崎の訴えと、地元松戸市の熱意が実を結んだよい企画であったと思う。

松田　斉

今月の一枚

「海軍救援隊解散・引アゲ」

今年、新たに戦時中海軍軍医が撮影した写真が、写真調査部会に提供された。インドネシア・セラム島や鹿児島県・鹿屋基地、終戦後の長崎で撮影された五〇枚である。

撮影者は原清（はらきよし）氏（一九〇九～一九五六）。当時、嬉野海軍病院勤務の原氏は、八月十五～二十七日の救援活動中に十六枚を撮影した。確認されている被爆後の写真としては、十日の山端庸介に次いで二番目に早い。これは八月二十七日、市内の新興善国民学校校庭での解散式終了後、原隊に復帰するため帰路に着く隊員たちの姿である。左手前に迷彩を施した校舎、遠景には風頭山と彦山が見える。